

コラム

動物園はなくなってしまうのか？

大阪市天王寺動物公園事務所 高見一利

1. はじめに

動物園は、皆さんにとってどのような場所でしょうか。昔、遠足で行った場所。家族で週末に訪れる場所。いずれにしても、動物を見ながら楽しく過ごす場所というイメージが強いのではないかと思います。しかし、最近の動物園には、楽しさを提供する以上にさまざまな取り組みが求められています。

2. 動物園は何をやるどころか

はるか昔の動物園は宗教や娯楽を目的としてつくられていました。皇帝や貴族が各地の動物を収集したという記録も残っています。一方で、古くから知識の源としても役立っており、古代ギリシャのアリストテレスも動物観察に用いていたようです。1828年に開園したロンドン動物園は科学の進歩を目的としており、世界初の近代的動物園と言われています。

国内初の動物園である上野動物園は、1882年に博物館付属施設として開園しました。当初は学問のための施設でしたが、やがて経営的観点からレクリエーション施設としての色合いが強まってきました。

動物園は博物館法によって、動物を飼育展示することで教育、レクリエーション、調査研究を行う機関と定義されています。これにもとづき、動物園は自らの機能を(1)教育、(2)レクリエーション、(3)自然保護、(4)研究の4項目であると定義しています。法律によって教育や研究を行う機関と規定されていますが、黎明期から今日までレクリエーションの機能が重視され、娯楽施設というイメージが定着しています。

しかしながら、近年、野生動物の生息数減少や感染症対策による取引規制の強化などにより動物の入手が難しくなってきたこと、さらには、絶滅が危惧される野生動物が増加し、生物多様性の保全が広く論じられるようになってきたことなどを受け、野生動物を殖やし育てるという機能が重視されつつあります。

3. 飼育動物を絶やさないために

動物園は動物を飼育して多くの方に見ていただく施設です。動物がいなければ成り立ちませんが、動物の入手は難しくなっています。キリンやゾウをアフリカで捕まえてくるという時代は、はるか昔に終わっています。今、動物園で飼育されているほとんどの動物は、動物園で生まれ育ったものです。

動物園で飼育できる動物の種類や数には限りがあります。私が勤める天王寺動物園では約200種1000頭を飼育していますが、キリンやトラといった大型の動物は数頭ずつしか飼育できません。オスとメスを1頭ずつ飼育していても、片方が事故や病気で死んでしまえば、その種はとどえてしまいます。うまく子が何頭か生まれたとしても、子の世代での繁殖は近親交配となってしまいます。このように、1つの動物園だけでは動物を維持できません。したがって、動物園どうしが協力して動物の貸し借りや交換を行い、各地の動物を1つの群れとみなして計画的に管理することで、動物を長期的に維持しようとしています。国内のおもだった動物園、水族館約150施設が加盟している公益社団法人日本動物園水族館協会(以下、日動水)が中心となって、150種ほどの動物に対して管理計画を策定しています。

飼育下での管理計画は、個体数の管理と遺伝的な管理という2つの要素を考慮して立案されます。個体数は、増やせばよいというものではありません。飼育のためのスペースや労力には限りがあるため、オスとメスの比率や年齢構成などにも配慮しながら、今よりも増やすのか、またどのようなスピードで増やすのかといったことを考えなければなりません。遺伝的には、近親交配をできるだけ避けるということだけでなく、群れ全体でなるべく多くの遺伝子を後世に残していくことを考えなければなりません。

このような2つの要素を考慮しながら、繁殖を促したり、制限したりすることによって、適切な状態に維持できるよう管理します。この管理計画は、種によっては世界的な枠組みでも進められています。



図1 管理計画にもとづく動物の貸し借りで生まれたホッキョクグマ

4. 動物園で希少動物を守れるのか

現在、絶滅が危惧される動物を守ろうとするさまざまな取り組みが多く種において行われており、動物園もその一端を担っています。

動物が本来生息している自然環境の中で守ろうとする取り組みを生息域内保全、動物園などのように本来の生息環境の外で行う取り組みを生息域外保全といいます。絶滅危惧種対策の最終的な目標は、その動物が本来の生息地で自立して安定的に生きている状態をつくることです。動物園での生息域外保全は、生息地での保全を支援するもので、活動の主役ではありませんが、動物園がやるべきことはたくさんあります。動物園で飼育されている動物は、生息地の野生個体が絶滅した場合、あるいは個体数が減少した場合に野生復帰させるためのバックアップとなります。また、動物園はその種の保全をはかるのに必要な生理、生態などの情報を得るための調査研究にも役立ちます。

動物園での生息域外保全の事例として、ツシマヤマネコとニホンライチョウの取り組みを紹介します。

長崎県の対馬のみに生息しているツシマヤマネコは、生息数が100頭弱と推定されています。種の保存法にもとづく保護増殖事業計画の一環として、動物園での生息域外保全が進められており、日動水が中心となって飼育下繁殖計画を策定し、飼育個体の増殖に努めています。飼育下では高齢化が進んでいるため、繁殖可能な個体を特定施設に集中させつつ人工繁殖技術を確立するという方針が策定されており、帝王切開や人工哺育の準備、精液採取や人工授精の導入が進められています。このように、将来の

野生復帰を視野に入れた取り組みが行われています。

ニホンライチョウは、中部地方の高山帯のみに生息している鳥です。生息数は2000羽程度で、減少傾向にあるとされています。ツシマヤマネコと同じく国の計画にもとづき、動物園が生息域外保全に取り組んでいます。飼育下での繁殖を始める場合、温度やえさ、施設構造などさまざまな要因を検討して繁殖に適した条件を見つける必要があるため、近縁種でのシミュレーションを行うことがあります。ニホンライチョウの場合、事前に別亜種であるスバルバルライチョウを飼育することで情報と経験を得ました。その上で、2015年に野外で採取した卵を人工的に孵化させることにより、生息域外保全が始まりました。今後、飼育下での取り組みがより積極的に進められるものと思われます。

5. 動物の幸せを考える

近年の動物園には、動物を増やし維持することだけでなく、動物福祉についてもこれまで以上の取り組みが求められています。動物福祉とは、動物の生命だけでなく、くらしそのものを尊重するという理念で、動物の立場から見て幸福なくらしを実現することです。動物福祉の向上には、本来その種がもつ行動レパートリーに近づけることが必要であると考えられています。そのために、えさをあちこちに隠すことで採餌にかかる時間を引き延ばしたり、樹上生活を種のために高い檣を設置して居場所をつくったり、群れ生活をする種では多数の個体を同居させて社会性を発揮させたりするなど、さまざまな方法が取り入れられています。

動物を肉体的にも精神的にも健康に飼えなければ、将来にわたって維持していくことは難しいため、動物福祉の向上は動物園にとっても重要なことです。

6. おわりに

動物園には、多くの人々に楽しさを提供しつつ、さまざまな動物を維持し守ることが求められています。しかし、このままでは近い将来消えていくか家畜園になってしまう可能性も存在しています。これからもしっかり役割が果たせるよう、今回ご紹介したような取り組みを進めていきますので、動物園を訪れた際に思い出していただくとありがたく思います。